

第102回日本精神神経学会総会

シンポジウム

臨床における「研究に携わること」の重要性
——研究を通じて身につく大事なこと——

染 矢 俊 幸（新潟大学大学院医歯学総合研究科精神医学分野）

精神医療は現在その医療構造自体が大きな変革期に差し掛かっている。我々は必要病床数の将来推計をもとにこれから30年間に起こる精神医療の変化を予想したが、大学病院、総合病院精神科、単科精神科病院、クリニックなど、さまざまな形態と機能をもつ施設が、それぞれの特徴を活かしながら相互に連携することが今後ますます重要になるだろう。大学病院精神科には、総合病院精神科の機能とは別に、特定機能病院としての機能、教育研究機関としての機能が求められるが、「研究の過程を通して得られる学習体験」は、最新の知識を謙虚にかつ批判的に学習し、客観的で幅広い視野を持った臨床医の育成、およびその後の生涯学習の基盤としてきわめて重要と思われる。

我々の教室では、分子遺伝、分子神経生物、機能画像、自律神経、臨床精神薬理、精神科診断、精神病理、リエゾン、自殺予防、精神療法、臨床心理学、児童などの研究班が活動しているが、彼らを対象に、精神科医として何のために勉強する

のか、また研究するのか、どんな勉強が役立っているか、研究を行う上でのモットー、などについて調査した。

その結果、教育・臨床研修との関連で、「研究は一部の優秀でモチベーションの高い人がするものと思っていたが、臨床研究に携わることで実は臨床の能力を高めることができた」という回答が多く得られた。例えば、臨床研究を通して最新の知見に触れ、知識を新たにすることができた。こうした知識が患者や家族に疾患や治療に関する説明の際に非常に役立った、診断と治療への理解が深まり、効果と限界を知ることができた。研究を通して論文を批判的に読むことができるようになった、客観的な症状評価や副作用評価を行う態度や技術が身についた、などである。当日は研究成果も紹介しつつ、研究の過程で身につく態度・技術そして倫理的配慮など、大学病院精神科で研修することの意義について考察したい。

（この論文は、抄録集より転載しました）